

手法

〔拳會角力圖會〕初心打習心得之事

阮藉○圖略、下做之 煮て食ふ下戸こそ白眼初がつほ 逸口 嵇康 夜は月をきたふ水あり夏
柳 凌也 山濤 雲ひとえうちの月みる友もがな 山阿 向秀 笛の音にむかし忍
ぶの軒端哉 澄湯 劉伶 いでや此雪に埋まば醉死ん 江齋 王戎 眈にくはで味
ふ李かな 呂馬 阮咸 ふどしさらす秋や心の唐錦 茶磨

先初心より拳を打ならはんとおもはゞ、一より十迄の聲をおぼえ、眼當とするに、楊枝かまたは竹串などをむかふにたてをきて、たとへば相手のイツカウを乞ひとるこゝろならば、串一本たて、こひとるべし、それもイツカウ、リヤン、サン、スウ、ゴウ、リウと稽古すれば、打登りといふ癖手になる、またリウ、ゴウ、スウ、サン、リヤン、イツカウとけいこすれば、下手といふ癖付てよろしからず、右の通りのぼりくだりにならぬやう、間ばらに稽古すべし、次に相手のよく出る指は、何からなにへかよふとおもふところにごゝろをつける事考がえの一なり、併しながら初心のうちには、思案工夫をするよりも、只達者にうつ事ばかりをこゝろがける方尤よろし、其云は、地取に押しして教ゆすべて此理に同じ、思案工夫は上達の後にすべし、其中に相手より乞に來る手を、我耳に聞込事を、兼々底心におきて打ざれば、何日上手の場にいたる事なし、

拳は酒席のたはむれといへども、禮儀を第一とす、禮儀なきときは、他の見聞もよろしからず、心得べし、多くは相手にむかひ、我方へ一拳折かけ、二拳めを折かけるときに、ハ子イなど、下知をなすに似たる言あり、男子にさへよからぬ言葉なるに、女子にまゝありて、甚聞ぐるしきものなり、よくかんがへ、慎しむべき事なり、全たひ是まで聞ゆるしてある、非言といふ事こそ可笑、ことも、行司が團扇を引てより、角力取が、倒たりとて、考がふべし、相手に向ひ打合時心得之事